

田沢湖線立体交差化工事における函体けん引工の施工について

東日本旅客鉄道(株) 東北工事事務所 正会員	○島児 伸次
東日本旅客鉄道(株) 東北工事事務所	初貝 隆一
東日本旅客鉄道(株) 東北工事事務所 正会員	渡部 修

まえがき

秋田新幹線の安全輸送対策として、JR田沢湖線（田沢湖～大曲間）では踏切廃止に伴う13箇所の立体交差化工事が進捗している。当社では、交差部であるこ道橋の新設にあたり、改軌工事¹⁾との関連で施工期間が限定されるため、急速施工法を計画した。本文はこのうちの3箇所で採用した函体けん引工法について報告するものである。

1. 施工計画

平成8年4月のバス代行輸送への切替えまでは通常の列車運行を確保し、改軌工事等の工程に支障しないように約1.5ヶ月で軌道の撤去から復旧までを計画した。施工の概略を図-1に示す。

2. 函体けん引工法

(1) 牽引方法

牽引方法の概略を図-2に示す。牽引工程の短縮と施工の確実性を高めるため、推進ジャッキを採用しフロンティジャッキの盛替え回数の減少と、方向制御の簡便化を図った。

(2) 牽引設備および使用器材

牽引設備として図-3のように架台用基礎コンクリート、ガイドレール、鋼板を設置した。基礎コンクリートの仕上げには特に留意し、天端にH鋼を設置して高さ管理を厳密に行った。函体底面には鋼板を敷設し牽引時の摩擦の低減を図った。また、B函体推進時には、推進に必要な(A+C)函体の反力が不足したため、C函体に突起コンクリート等を設けた。使用器材を表-1に示す。

3. 牽引施工結果と考察

(1) 工程

軌道撤去から復旧までの工程を表-2に示す。前述のとおり、秋田新幹線工事の全体工程との関連から工程管理には特に留意した。バス代行輸送切替え後の軌道撤去から函体牽引まで約30日、さらに軌道復旧まで約20日の工期を要した。

(2) 牽引力と摩擦係数

3事例における結果を表-3に示す。表中の移動時の牽引力は最大値を用いて計算している。またA函体移動時の牽引力は推進ジャッキの戻り反力を控除している。設計計算における摩擦係数は、反力函体 $\mu=1.0$ 、移動函体(腰切時 $\mu=1.2$ 、移動時 $\mu=1.0$)とし、安全率を1.2としている。これに対し施工結果では、腰切時 $\mu=0.60\sim0.77$ 、移動時 $\mu=0.67\sim0.91$ となった。架台基礎コンクリートの施工精度、ゲージの読み取り誤差等を考慮すると、今回のような施工条件での摩擦係数は $\mu=1.0$ 程度のようである。

(3) 施工精度

函体接合後の目違ひ量を表-4に示す。各函体の道路中心での目違ひ量は0～10mm程度であった。函体牽引では少なからず方向制御が必要となった。今回はフロンティジャッキ・推進ジャッキ共に、函体中心に対称に配置したが、函体重心を考えた配置とすれば方向制御がより容易になると思われる。

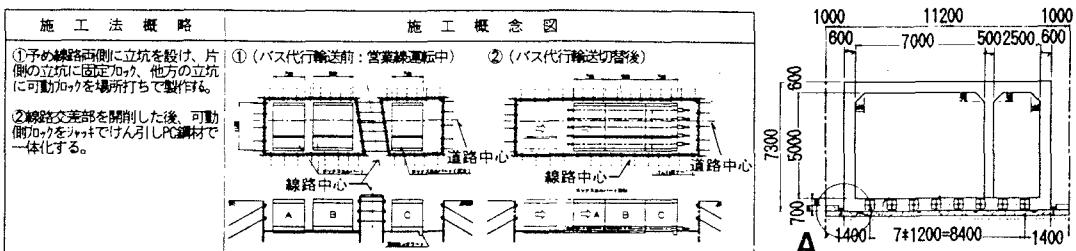


図-1 施工の概略

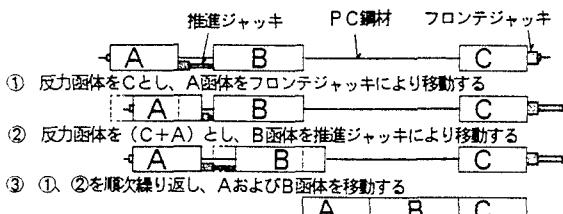


図-2 奉引方法

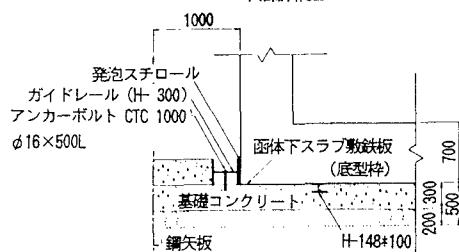


図-3 奉引設備

表-1 使用器材

	機材名	推力(t)	ストローク(mm)	重量(kg)	台数
A函体牽引	フロントジャッキ(FJ-150)	150	850	1200	8
	油圧ボンプ(20p)	—	—	1350	1
B函体推進	推進ジャッキ(SJ-150)	150	500	300	9
	油圧ボンプ(20p)	—	—	1350	1

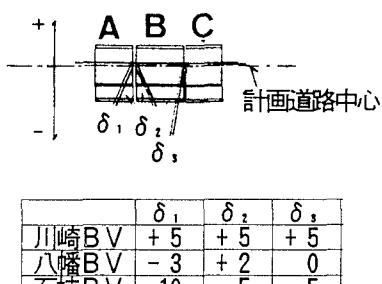
表-2 工事工程

作業割別	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60
動線てつ去	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SPP打込み	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アスガル 振動	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SPP引抜き	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
基礎カット工	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
げんり工	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
埋設工	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
地盤等	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
動線復旧	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

表-3 奉引力と摩擦係数

表-4 奉引後の出来形 単位(mm)

工区			函体重量W(tf)	けん引力P(tf)	摩擦係数 $\mu = P/W$	備考
川崎BV	A函体	腰切時	467	280	0.60	フロントジャッキ 8台
		移動時	467	MAX 392	0.84	フロントジャッキ 8台
八幡BV	B函体	腰切時	935	634	0.68	推進ジャッキ 9台
		移動時	935	MAX 672	0.72	推進ジャッキ 7台
石持BV	A函体	腰切時	441	333	0.76	フロントジャッキ 5台
		移動時	441	MAX 388	0.88	フロントジャッキ 5台
	B函体	腰切時	441	339	0.77	推進ジャッキ 6台
		移動時	441	MAX 400	0.91	推進ジャッキ 6台
	A函体	腰切時	442	315	0.71	フロントジャッキ 5台
		移動時	442	MAX 467	0.83	フロントジャッキ 5台
	B函体	腰切時	559	395	0.71	推進ジャッキ 6台
		移動時	559	MAX 376	0.67	推進ジャッキ 6台



あとがき

秋田新幹線工事における立体交差化工事では、これまで述べた函体けん引工法のほか、プレキャストブロック工法などを採用して急速施工を行ってきた。今後さらに検討を加えていきたいと考えている。

注) ¹⁾ 従来の狭軌（左右のレールの間隔が1067mm）から、新幹線と同じ標準軌（1435mm）に変更する工事